

出品作家

わかみや たかし
若宮 隆志

彦十蒔絵プロデューサー

WAKAMIYA Takashi
Producer of HIKOJU MAKIE

この度、かねてより念願であった加彩婦女俑、加彩宮女俑を漆器で制作する機会を得た。加彩婦女俑は曲線的な造形と穏やかな顔や手の表情に魅力を感じていたので粘土から形をおこして麻布と漆で制作する乾漆技法を用いて制作するのが相応しいと考えた。手には鳥がとまっていたかもしれないとの事であったので想像で鳥を制作した。加彩宮女俑は繊細な造形に複雑な装飾があるので木彫で表現するのが相応しいと考えた。陶器の作品をあえて漆器で見立て制作する事を彦十蒔絵では「見立漆器」として商標登録している。見立は対象を何か別のものになぞらえて表現する美意識で和歌や俳諧でも用いられ洒落にも通じ私の好きな表現方法である。今回この2点の作品をこの時代に漆器で制作することで、漆芸の可能性を広げる事と加彩婦女俑、加彩宮女俑に対し更に関心が高まる事を期待している。

漆芸家として作品発表を行う傍ら、塗師や蒔絵師といった一つの職分に止まらず、伝統的な意匠や文様の継承を考えながら新しい作品を企画し、それに相応しい職人を育成組織する「彦十蒔絵」のプロデューサーとしても活動している。漆器の市場開拓、海外発表なども積極的に展開している。



- 1964年 石川県輪島市生まれ
- 2004年 彦十蒔絵の名前で活動始める
- 2005年 Museum für Lackkunst(ミュンスター/ドイツ)にて作品収蔵
- 2007年 Victoria and Albert Museum(ロンドン/イギリス)にて作品収蔵
- 2014年 2014年度文化庁文化交流使
- 2016年 香港大学美術博物館「若宮隆志の芸術～現代日本蒔絵」個展
- 2017年 「香港国際アンティークフェア 特別日本漆芸展」出品
- 2018年 ドイツ・ミュンスターMuseum für Lackkunst
「世界の漆友人展～Dr. Monika Kopplin館長退館記念展」出品
- 2019年 中国湖北美術館「2019湖北国際漆芸三年展」出品
- 2019-21年 特別展「小村雪岱スタイル—江戸の粋から東京モダンへ」出品
(岐阜県立現代陶芸美術館、三井記念美術館、富山県立水墨美術館、山口県立美術館)
- 2020年 大阪市立東洋陶磁美術館特集展「現代の天目—伝統と創造」出品
サントリー美術館「リニューアル・オープン記念展」出品
- 2021年 石川県輪島漆芸美術館開館30周年記念特別展「メイド・イン・ワジマ漆の時代」出品
- 現在 輪島漆再生プロジェクト実行委員会代表

出品作家

あん どう ひで ゆ き
安藤 英由樹

大阪芸術大学アートサイエンス学科教授

ANDO Hideyuki

Professor, Department of Art Science, Osaka University of Arts

8世紀につくられた加彩婦女俑から、元来持っていた色彩は失われ、そのことが逆に様々な想像を駆り立てる。今だったらどんな色使いがあるだろうか? 「加彩再加彩」では3Dで映し出される婦女俑を指先で回したり、自在に色を塗ることができる。あなたが思うように彩色してみしてほしい。「带我去未来」では、透過ディスプレイによって、貴重な美術品に影響を与えることなく、映像を重ねるAR技術を用いている。今回は3Dスキャン&プリント技術を用いて複製された婦女俑に対し、昔はこうだったけど今だったらこうしたいだろうか? などと思いを馳せた芸大生の妄想を具現化してみた。加彩婦女俑によって想起される過去から未来。案外デジタルがその後押しをしてくれるのかもしれない。

ヒトの感覚-知覚-運動の原理をもとにVR、AR、XRの分野を中心に錯覚利用インタフェース、医師と共同して手術追体験トレーニングシステム、Wellbeingを実現する情報技術と社会デザインなどの研究に従事。70篇以上の論文、50件以上の特許など基礎研究に加え、芸術表現としての先端的科学技術の社会貢献にも関心を寄せ、自らも作品制作を行なう。



- 1974年 岐阜県可児市生まれ
- 1999年 愛知工業大学電気電子工学専攻修士号取得、博士課程中退
- 2001年ー 東京大学にて、JST「協調と制御」領域研究員
- 2004年 東京大学で論文博士として博士(情報理工学)授与
- 2004年 NTTコミュニケーション科学基礎研究所研究員
- 2008年 大阪大学大学院情報科学研究科准教授
第12回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞
- 2009、11年 PRIX ARS ELECTRONICA
(アルス・エレクトロニカ インタラクティブ・アート部門)HonoraryMention受賞
- 2020年 大阪芸術大学アートサイエンス学科教授(現在にいたる)

出品作家

さかづめ こうたろう
坂爪 康太郎

陶芸家／仮面作家／アーティスト

SAKAZUME Kotaro
Mask Artist, Ceramic Artist

加彩婦女俑を題材に、2点の作品を制作する。1点目は加彩婦女俑の3Dデータを利用し、加彩婦女俑の成形型や複製品の制作を試みる「加彩婦女俑レプリケーション」。フォトグラメトリなどによる3Dデータの採取や3Dプリントが普及した現代では、既存の立体物の形状コピーは以前と比べ格段に容易になった。このような時代背景で、オリジナルという定義もまた変化し、揺らいでいる。私は加彩婦女俑のオリジナルが既に複製技術である型成形で制作されていたという点にオリジナリティを見出し、その成形工程ごと再現を試みる。2点目は加彩婦女俑をモデルにした仮面の創作だ。仮面制作は私にとって対象となる場所や時代と関わるための儀式のようなものだ。日本には中国より伝わった伎楽で用いられる伎楽面という仮面があり、日本最古の演劇面だとされている。加彩婦女俑が制作された唐時代は、伎楽面伝来の時期とも重なる。伎楽面は、頭からすっぽりと被るため後頭部までつくられているので、頭部の造形は見所の一つだ。法隆寺に納められている呉女の伎楽面にも頭頂部にみごとな双環髻そうかんけいが表されている。この伎楽面の様式に則り、加彩婦女俑の特徴的な鬢びんまげや髻の形状を取り入れたTOMB LADY MASK feat. GIGAKU STYLEを制作する。

民族儀礼に用いられる仮面や祭具、SF小説やアニメなどの物語を題材に、立体作品やコラージュ作品を制作する。2018年にはバーチャルろくろでデザインしたセラミックプロダクトを展開するP&A ceramic wareをスタートさせる。陶芸教室P&A ceramic classの運営も行うなど多方面で活動する。



- 1988年 東京生まれ
- 2012年 武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科陶磁専攻卒業
- 2015年 西武渋谷シブヤスタイル vol.9 出展
- 2016年 KOHLER Bold Art 上海2016 選出
- 2017年 ささま国際陶芸祭2017 出展
- 2019年 ささま国際陶芸祭2019 出展
- 2019年 ART START UP 100選出
- 2020年 個展 A space Odyssey／STUDIO hive